

妄想才口手伝



THE HYPERMAN

練師は孫尚香と共に妖魔軍から逃れるべく奔走していた。
しかしある時妖魔軍に隙を突かれ、危うく共に捕らえられそうになつてしまう。
練師は自らが囹になることで孫尚香を逃がしたが、彼女自身は抵抗したものの力及ばず捕まつてしまった。
妖魔軍の拠点の牢獄に捕らえられた練師は死を覚悟したが、どうやら妖魔軍には別の目的があつた。

何をするつもりなの!?

ギョッ

清盛様から授かつたこの妖術で

貴様を傀儡に変えるのよ!

くっ...
そんなことさせないわ!

クスクスク

クッ

人間の英傑の力を欲した妖魔たちは、妖術の力で彼女を傀儡にすると告げた。
妖魔どもの操り人形にされるくらいならば...
練師はそう考えるが、しかしそれでも彼女は希望を捨て去ることができなかつた。
人間の力を、仲間たちの力を彼女は信じていた。



妖魔が禍々しい気を放つ呪具を練師の目の前に
かざした瞬間、練師の視界が暗闇に包まれた。
一瞬後にはその暗闇が晴れたが、眼前の光景は
先ほどまでとは異なっていた。
肉と植物が合わさったような異様なものが
練師の身体に絡みついていた。

な…何っ!?

いつの間にかこんな…

ムネムネ

ムネ

ムネ

突然のことに、練師は状況が掴めないでいた。
妖術による幻覚ではないかとも考え、彼女は努めて
平静を装った。
しかしそれは幻覚などでは無く、着実に状況は
悪化の一途を辿っていた。

妖魔が禍々しい気を放つ呪具を練師の目の前に
かざした瞬間、練師の視界が暗闇に包まれた。
一瞬後にはその暗闇が晴れたが、眼前の光景は
先ほどまでとは異なっていた。
肉と植物が合わさったような異様なものが
練師の身体に絡みついていた。

なる…!?

子を生してない私が
母乳を出すなんて…

あり得ない…

こんな幻を私に見せて…
いったいどうしようと言うの!?

突然のことに、練師は状況が掴めないでいた。
妖術による幻覚ではないかとも考え、彼女は努めて
平静を装った。
しかしそれは幻覚などでは無く、着実に状況は
悪化の一途を辿っていた。

ビュッ

ビュッ

練師がまばたきをした次の瞬間、またもや彼女を取り巻く状況は変化していた。これも幻かと思ったが、何かがおかしい。身体に絡みつく触手の感触は本物としか思えず、そして更には体力の消耗を感じていた。

なんでこんな...!?

ズズッ

おあ、し

ロフト

ロフト

びん

練師はこの筋肉の痛みや疲労感に覚えがあった。まるで、先ほどまで戦場に居たかのような...。練師の頭に、嫌な考えが浮かんでいた。

練師がまばたきをした次の瞬間、またもや彼女を取り巻く状況は変化していた。これも幻かと思ったが、何かがおかしい。身体に絡みつく触手の感触は本物としか思えず、そして更には体力の消耗を感じていた。

私を玩具にでもしているつもり!?

ズグググ

ズグググ

ズグググ

ふざけないでっ!

練師はこの筋肉の痛みや疲労感に覚えがあった。まるで、先ほどまで戦場に居たかのような。練師の頭に、嫌な考えが浮かんでいた。

練師はすでに、妖魔たちの傀儡として何度も戦場に出ていた。そのことに練師は自力で気付けたが、彼女にできることは多くなかった。知らぬ間に戦闘による疲労が溜まり、自分の意識を取り戻した時にはすでに暗い牢獄に拘束され、身動きが取れなかった。

痺気…!?

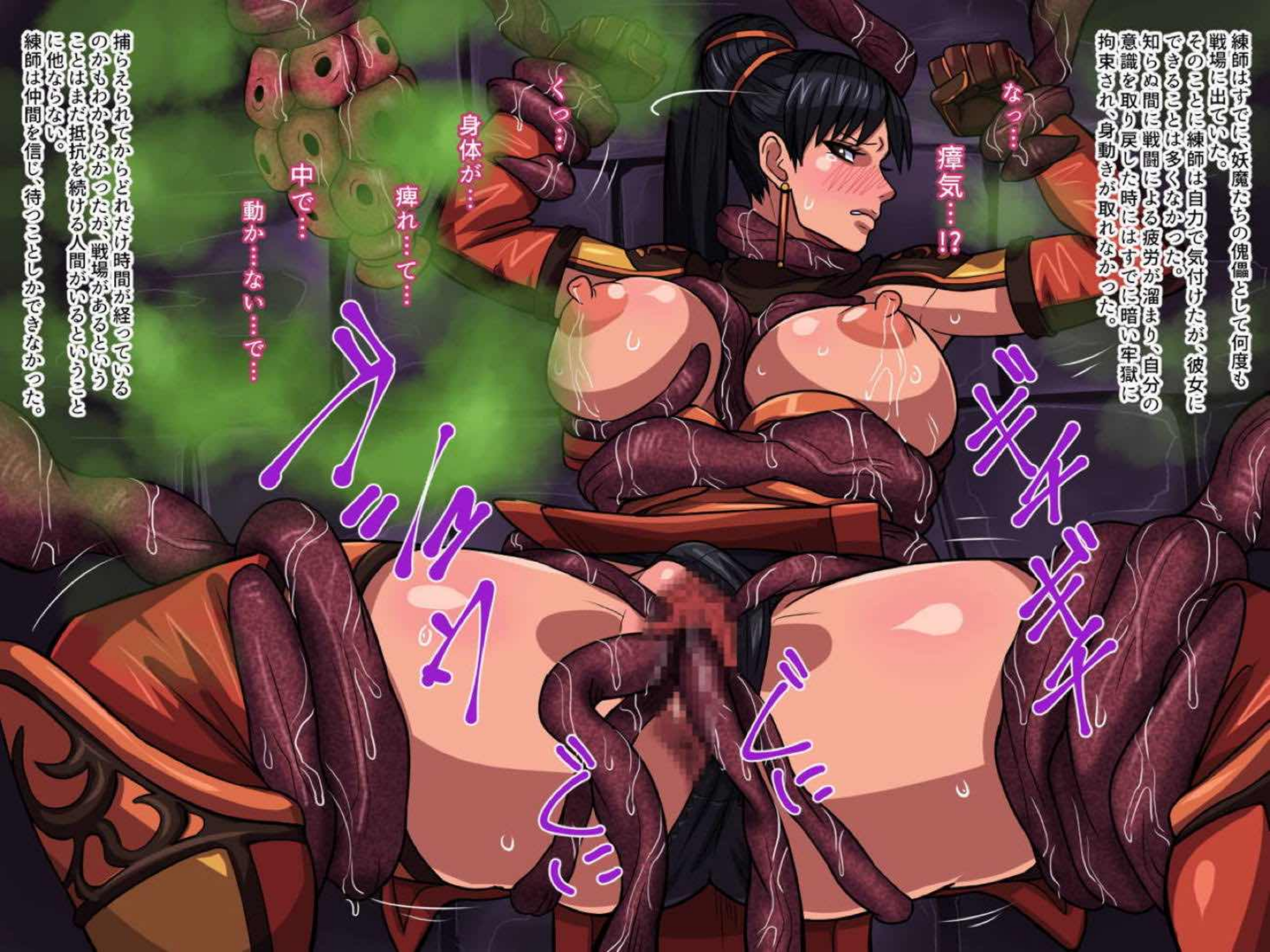
身体が…

痺れ…て…

中で…

動か…ない…で…

捕らえられてからどれだけ時間が経っているのかもわからなかつたが、戦場があるということとはまだ抵抗を続ける人間がいるということに他ならない。練師は仲間を信じ、待つことしかできなかった。



練師はすでに、妖魔たちの傀儡として何度も戦場に出ていた。そのことに練師は自力で気付けたが、彼女にできることは多くなかった。知らぬ間に戦闘による疲労が溜まり、自分の意識を取り戻した時にはすでに暗い牢獄に拘束され、身動きが取れなかった。



捕らえられてからどれだけ時間が経っているのかもわからなかったが、戦場があるということとはまだ抵抗を続ける人間がいるということに他ならない。練師は仲間を信じ、待つことしかできなかった。

練師がふと気が付くと、目の前に呪具を持った
妖魔が立っていた。
練師の全身をまじまじと眺めながら妖魔が
言い放った言葉が、彼女の焦燥感を増大させる。

気付いているか？

貴様の身体を形作る骨や肉が

魔を帯びて我々に近づいていることを

何を言っている？

その手を退けなさい！

くっ

んっ

貴様の肉体はすでに

完全な人間ではないのよ

人間風情にはわからんだろうがな

う……嘘よ！

練師に絡みつく下級妖魔の体液が彼女の身体に
注入され、魔は徐々に彼女の身体を蝕んでいた。
見た目にはわからず、しかしそれが進むほどに
妖術に対する抵抗が難しくなっていた。

骨

肉

練師がふと気が付くと、目の前に呪具を持った
妖魔が立っていた。
練師の全身をまじまじと眺めながら妖魔が
言い放った言葉が、彼女の焦燥感を増大させる。

くさいくさい人間の臭いが随分抜けて

美味そうな匂いが漂ってるぜ

やめろ……

んおっ！

ぐっがっ！

練師に絡みつく下級妖魔の体液が彼女の身体に
注入され、魔は徐々に彼女の身体を蝕んでいた。
見た目にはわからず、しかしそれが進むほどに
妖術に対する抵抗が難しくなっていた。

がたがた

ハタタ

トリッ

ビビ

練師が意識を保っている間は身動きが取れない
まま陵辱を受け続け、意識を失っている間は
戦場へと駆り出された。
肉体的にも精神的にも真に休息が取れる時間が
ほとんど得られず、流石の練師も疲弊していた。

このままでは妖魔軍の兵隊となり果て、死ぬより
も屈辱的な結果が待っていることを知った。
しかし激しい責めに自然と声を上げてしまい、
満身に抵抗ができない自分に焦りと怒りが募って
いた。



ある時、練師は戦場でぼんやりとだが意識を取り戻したことがあった。視界の隅に自分が守るべき孫呉の姫の姿を見つけたが、しかし自身の身体の自由が利かず歯痒い思いをした。しかしそれでも、練師は本心からその無事を喜んでいた。

あつ……！

熱っ……いいい

あつ……！

気付けば、練師は暗い牢獄にいた。あれは夢か幻か、しかし練師は信じていた。今でも仲間達は妖魔軍との戦いを続けている。自分だけがここで屈するわけにはいかない。決意を新たにしているが、彼女の戦いは未だ終わりが見えなかった。



練師の肉体は下級妖魔の体液によって徐々に魔を帯び、人間にはわからない部分で変異が起きていた。妖魔からすれば人間の雌などただの餌でしかなかったが、肉体の変異によって徐々にその認識は変わっていった。

んむうつ！

んんんんっ！

ズクザク

気が付くと、練師の見慣れない下位の妖魔たちが彼女に群がり、次から次へとその穴に精液を注ぎ込んでいた。この者たちにとっては既に、練師は立派な雌として認識されていた。

練師の肉体は下級妖魔の体液によって徐々に魔を帯び、人間にはわからない部分で変異が起きていた。妖魔からすれば人間の雌などただの餌でしかなかったが、肉体の変異によって徐々にその認識は変わっていった。

んがおおっ！

んがおおっ！！

気が付くと、練師の見慣れない下位の妖魔たちが彼女に群がり、次から次へとその穴に精液を注ぎ込んでいた。この者たちにとっては既に、練師は立派な雌として認識されていた。



下級妖魔の精液をいくら注ぎ込まれたところで、
使い捨てられるために生み出されたような存在に
子を作るほどの生命力は無かった。
しかし、それを注ぎ込まれるほどに練師の肉体に
魔が馴染み、行為の快感は強くなっていた。

やめなさっ…

んぶっ！

んっ！

んんんっ！

練師がいくら叫んだところで、下位の妖魔に言葉は
通じなかった。
前線には出されることのない屑肉のような存在に、
人間たちの英傑の一人として数えられる練師は
なすすべなく陵辱され続けた。



下級妖魔の精液をいくら注ぎ込まれたところで、
使い捨てられるために生み出されたような存在に
子を作るほどの生命力は無かった。
しかし、それを注ぎ込まれるほどに練師の肉体に
魔が馴染み、行為の快感は強くなっていった。

んおおっ！

んぶうぶうぶうぶ！

おええっ

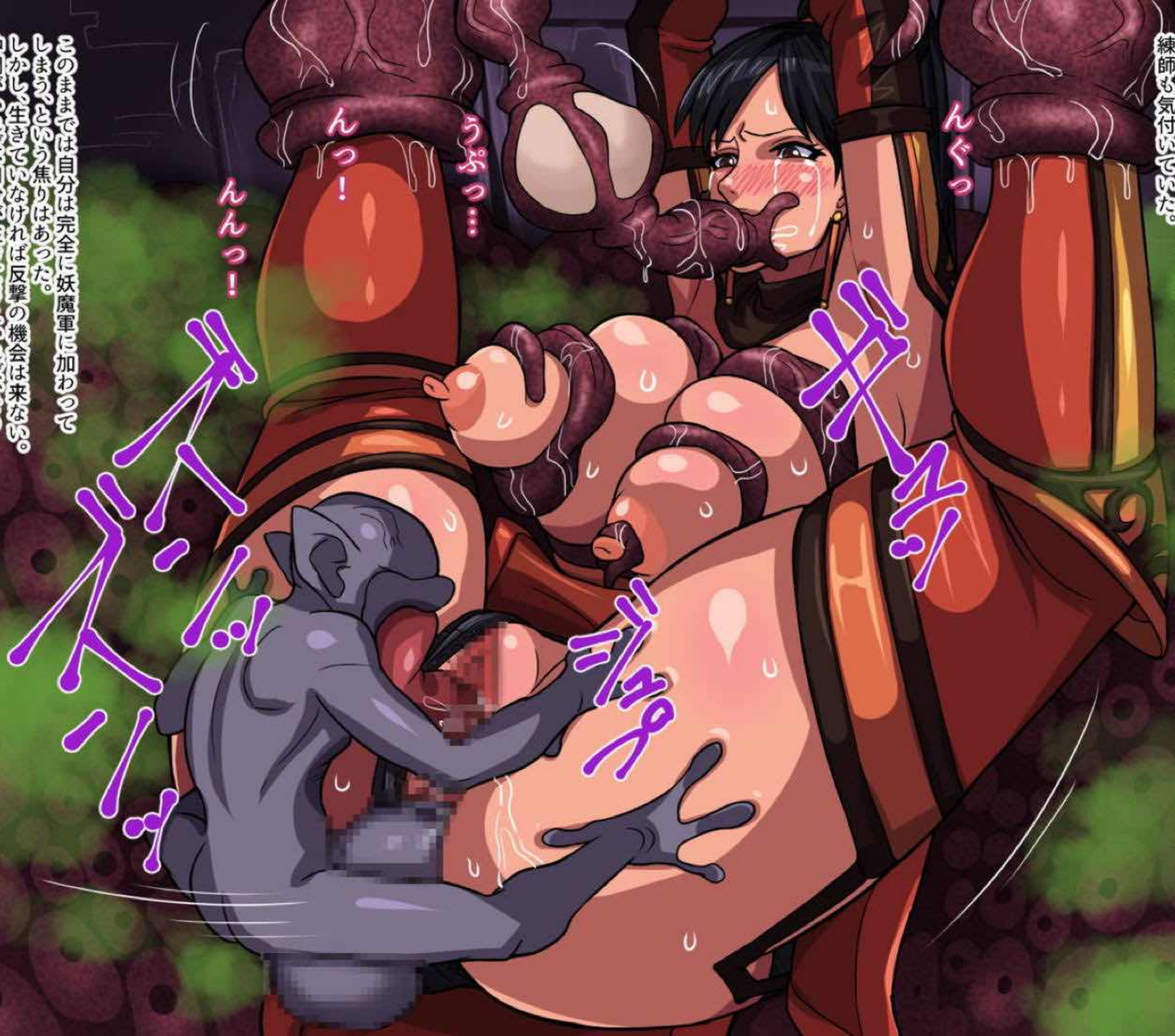
おぼおおおっ！

練師がいくら叫んだところで、下位の妖魔に言葉は
通じなかった。
前線には出されることのない屑肉のような存在に、
人間たちの英傑の一人として数えられる練師は
なすすべなく陵辱され続けた。



練師が自分の意識を保っている間だけでも、
優に数日は経過していた。
詳しく何日が経過しているかは練師にもわか
らないが、その間まともな食事も取れず、妖魔の
体液によって生かされている状態であることは
練師も気付いていた。

このままでは自分は完全に妖魔軍に加わって
しまう、という焦りはあった。
しかし、生きていなければ反撃の機会は来ない。
仲間がいれば、自分が生きてさえいれば、そう
考える練師は甘んじてその体液を飲み込んだ。



練師が自分の意識を保っている間だけでも、
優に数日は経過していた。
詳しく何日が経過しているかは練師にもわか
らないが、その間まともな食事も取れず、妖魔の
体液によって生かされている状態であることは
練師も気付いていた。

このままでは自分は完全に妖魔軍に加わって
しまう、という焦りはあった。
しかし、生きていなければ反撃の機会は来ない。
仲間がいれば、自分が生きてさえいれば、そう
考える練師は甘んじてその体液を飲み込んだ。



練師が次に目覚めた時、再び戦場にいた。今度は意識がはつきりとしていたが、やはり身体の自由は利かなくなかった。まるで自分そっくりの操り人形に意識だけが閉じ込められているように、自分の放つ矢が人間たちを射抜いていく光景を強制的に見せられていた。

私は……

あなた達の玩具じゃ……

ないっ……
のよっ……!

んっぐっ!!

そのまま意識が途切れることなく妖魔の拠点へ帰還し、牢獄へと入ったところで自分を操る糸が緩められた。しかし、練師は自分の身体に溜まった疲労に耐え切れずに地面に倒れ込んでしまう。戦場に出ているのだから、自由にさえなれば戦えると練師は考えていた。しかし、その考えは簡単に打ち碎かれた。

練師が次に目覚めた時、再び戦場にいた。今度は意識がはつきりとしていたが、やはり身体の自由は利かなくなかった。まるで自分そっくりの操り人形に意識だけが閉じ込められているように、自分の放つ矢が人間たちを射抜いていく光景を強制的に見せられていた。

やめっ！

また…

イツちや…

んぎっ！

んぎっ！

そのまま意識が途切れることなく妖魔の拠点へ帰還し、牢獄へと入ったところで自分を操る糸が緩められた。しかし、練師は自分の身体に溜まった疲労に耐え切れずに地面に倒れ込んでしまう。戦場に出ているのだから、自由にさえなれば戦えると練師は考えていた。しかし、その考えは簡単に打ち碎かれた。

んぎっ！

練師がふと気が付くと、呪具を携えた妖魔が
すぐそばに立つていた。
その出で立ちを見るに、ただ呪具を預かつて
いるだけの雑兵なのだろう。
練師の調子が万全ならば、雑兵如きが束に
なつたところで負けることは無い。
しかし、精神的にも疲弊している練師にその
呪具に抗う力は残されていなかった。

これから貴様は

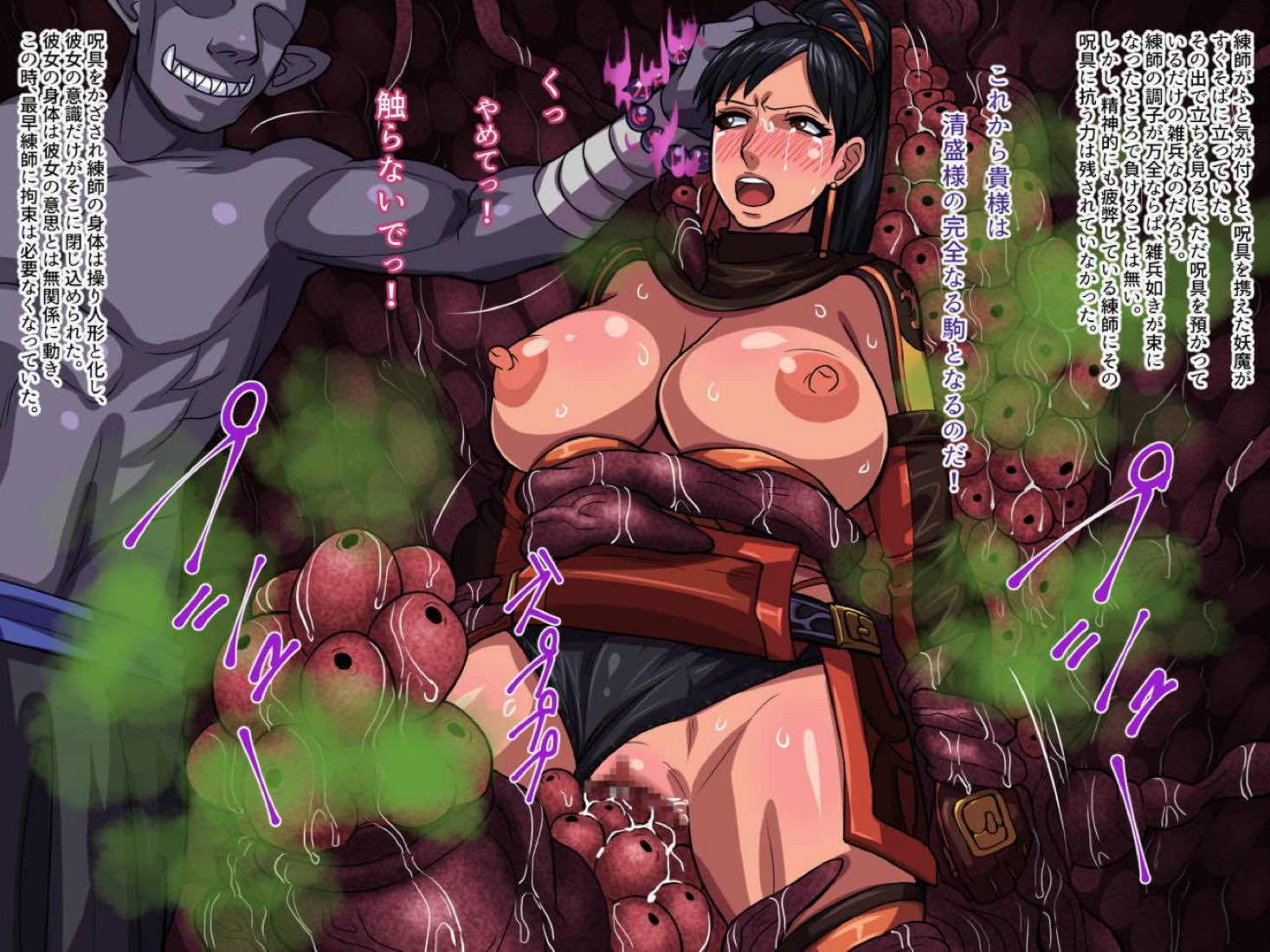
清盛様の完全なる駒となるのだ!

触らないでっ!

やめてっ!

くっ

呪具をかざされ練師の身体は操り人形と化し、
彼女の意識だけがそこに閉じ込められた。
彼女の身体は彼女の意思とは無関係に動き、
この時、最早練師に拘束は必要なくなっていた。



練師がふと気が付くと、呪具を携えた妖魔が
すぐそばに立つていた。
その出で立ちを見るに、ただ呪具を預かつて
いるだけの雑兵なのだろう。
練師の調子が万全ならば、雑兵如きが束に
なつたところで負けることは無い。
しかし、精神的にも疲弊している練師にその
呪具に抗う力は残されていなかった。

ああっ！

ああああっ！

はっはっはっ！

人間が苦しむ姿ってのは

最高だなあ！

呪具をかざされ練師の身体は操り人形と化し、
彼女の意識だけがそこに閉じ込められた。
彼女の身体は彼女の意思とは無関係に動き、
この時、最早練師に拘束は必要なくなっていた。



練師の感情が高ぶった時、一言二言ならば何故か言葉を発することができた。まるで練師の精神力が妖術を打ち破ったかのように思えたが、その実、人間の苦しむ姿を見たいがための妖魔の卑劣な策略でしか無かった。

ふっ！

うっ！

止まら……

なっ……

いっ！

……でもっ

希望はっ……！

うっ！

ぐっ！

練師にとつてはそれが、暗闇に差し込んでいく一筋の光だった。練師の心がまだ死んでいないが故に、この地獄からの解放が遠ざかっていた。



練師の感情が高ぶった時、一言二言ならば何故か言葉を発することができた。まるで練師の精神力が妖術を打ち破ったかのように思えたが、その実、人間の苦しむ姿を見たいがための妖魔の卑劣な策略でしか無かった。

ひっ！

びゅんぶんぶん！

イッ！

ぐんぐんぐんぐんぐん！！

止まっ

でええええっ！

練師にとつてはそれが、暗闇に差し込んでいる二筋の光だった。練師の心がまだ死んでいないが故に、この地獄からの解放が遠ざかっていた。



練師が捕らえられ、既に数週間が過ぎていた。その期間の連日の陵辱に耐えつつも、精神を破壊されずに自分を保つていられる人間はそうそういないだろう。しかしある時、練師のいる牢獄の外で妖魔たちが話す言葉が彼女を動揺させた。

また人間を捕まえたらしいぞ……

……んむっ!?

んんっ

んんっ

んぶっ

おん

奴らが根絶やしになるのも

時間の問題だな……

まさか姫が……練師にはその考えが浮かんだがそれを確認する機会は来なかった。ゆつくり考え事ができる環境もここには無く誰かの心配をしていられる余裕は無かった。

妖魔の体液による練師の肉体の変異は進み、中級妖魔が占める雑兵たちも彼女を雌だと認識するようになっていった。ただ、人間と同等の知能を持つ妖魔たちにも好みがあるらしく、練師のような存在を好むのは二部の物好きだけらしい。

「おっ！」

「えっ！」

「どんどん溢れてくるぜ！」

「んおっ！」

「げえっ！」

「いくらでも飲めちまうぜ！」

「いくらでも」

人間たちの抵抗が弱まったことで戦場へ駆り出される回数も減り、陵辱の時間だけが増えていく。このままでは仲間の助けも望めず、妖魔どもを喜ばせるだけの玩具と化してしまう。そんな未来を前にして、練師の心を暗いものが覆い始めていた。



妖術によって練師の肉体が眠らない限りは意識を失うことも許されなかったために、練師の精神はとうとう限界を迎えつつあった。そんな状態の彼女に追い打ちをかけるように、残酷な真実が告げられる。妖術を打ち破ったと思っていたのは幻想であり、ただ自分を苦しめるために仕組まれたことだと知った。

戦場に出る者は子を残したがる

貴様が淫乱になり下がったのは

貴様の身体がそれを求めて

いるからに過ぎんによ

嘘……よ！

貴様の意識が肉体と切り離され

貴様の身体は喜んで

我らを受け入れているぞ

だっ……

黙りなさいっ！

そんな訳が……っ

そして同時に、練師には到底認め難い言葉を告げられた。練師は正真正銘、妖魔たちの玩具だった。見えていた希望は偽りであり、彼女にできることは何も無かった。

練師を飲み込んだ妖魔は彼女を気に入ったのか、自分の体内に彼女を繋ぎとめて離さなかつた。子を作れるところまで彼女の肉体を変異させるため、彼女の穴という穴に触手が侵入し、そこに体液を注ぎ込んだ。妖魔の体液に練師は生かされ、そこで朽ちることは許されないのだと彼女は悟つた。そこに絶望以外の感情は無かつた。

そいつは余程貴様を
気に入つたようだな

んんっ
グロ……

んぐっ

んっ

ニタニ

貴様など既に用済みだからな

余生をそいつの玩具として

過ぎすがいい

ハカ

アロ

この少し後、練師の知らぬところで未だ生き残つていた三人の英傑の元へ、仙界より時間移動を可能とする仙人が助力を申し出ることになる。過去に戻つた英傑たちの奮闘により、練師を含む仲間たちは無事に助け出されることになるのだが、それはまた別の話である。

